

『鬼海嶋夢物語』『七小町図』 影印・翻刻

早稲田大学近世貴重本研究会

雲 英 末 雄
伊 藤 善 隆
二 又 淳

青本『鬼海嶋夢物語』と一枚摺『七小町図』を紹介する。

『鬼海嶋夢物語』は、『国書総目録』では「日本小説年表による」として所在を記さない。木村八重子『赤本黒本青本版心索引（予備版）』（書誌学月報別冊1、平成九年六月、青裳堂書店）にも記載はない。今まで所在の確認できなかった新出本と思われる。

識語に見られるように、三田村彦五郎旧蔵本である。三田村彦五郎は、江戸中期、草双紙を出版当時に集めていたコレクターである。『^{伏見}夜船沖津白波』『勅宣養老水』影印・翻刻』（早稲田大学図書館紀要）48号、二〇〇一年三月）で、三田村彦五郎旧蔵本二点を紹介したので、ご参照いただければ幸いである。

一枚摺『七小町図』は、青本黒本期の草双紙を代表する作者富川房信の描くもので、浮世絵細判サイズ一枚摺である。類例を知らないで紹介することとした。

『鬼海嶋夢物語』は、『明治古典会古書大入札会目録』（平成十五年七月、明治古典会）に掲載されたもので、このたび新収となったものである。『七小町図』も新収資料である。

なお、翻刻にあたっては、句読点・濁点などを付し、通読の便を配慮して、平仮名に適宜漢字をあてて、もとの平仮名を振り仮名として残した。また、会話文・心中思惟などには適宜「」を付した。

青本『鬼海嶋夢物語』（明和四年刊）

書誌

浅葱色表紙中本三冊（十七・八×十三・〇糎）。絵題箋は、上巻を欠くが、中・下巻は「（〇）の中に「い」／鬼海嶋夢物語」中（下）」（十五・七×十・三糎）。柱題「きかいが（か）しま」（明和四年）刊。奥村源六板。

解題

『平家物語』や謡曲「俊寛」などで著名な、俊寛が鬼海嶋に流罪となったことに取材したもの。江戸期には、近松門左衛門の浄瑠璃『平家女護島』（享保四年初演）で有名であったが、俊寛が鬼海嶋において、千鳥を都懐かしげに眺めやるのは、『平家女護島』の二段目「鬼海が島」の場に、島の女性千鳥を配したことの影響があるのであろう。

ただし、俊寛の家来有王丸が、俊寛を裏切る点や、俊寛の夢物語の趣向などは、典拠は不明である。父清盛の悪逆に心痛め切腹したはずの重盛が、最後再び登場するなど矛盾する箇所もある。おそらくは、浄瑠璃か歌舞伎に基づく作品であろうが、原拠を明らかにし得なかった。

本作は、『国書総目録』に「黒本 鳥居清経画 *日本小説年表による」とあるのみ、小説年表類は、出版年代未詳部に載せるので、従来刊年は知られていなかった。

新収本中・下巻に残る絵題箋には、左上に、「〇」の中に「い」とある。この時期の草双紙は、左上に十二支を表す絵や文字を



上巻表紙



1 オ

翻刻

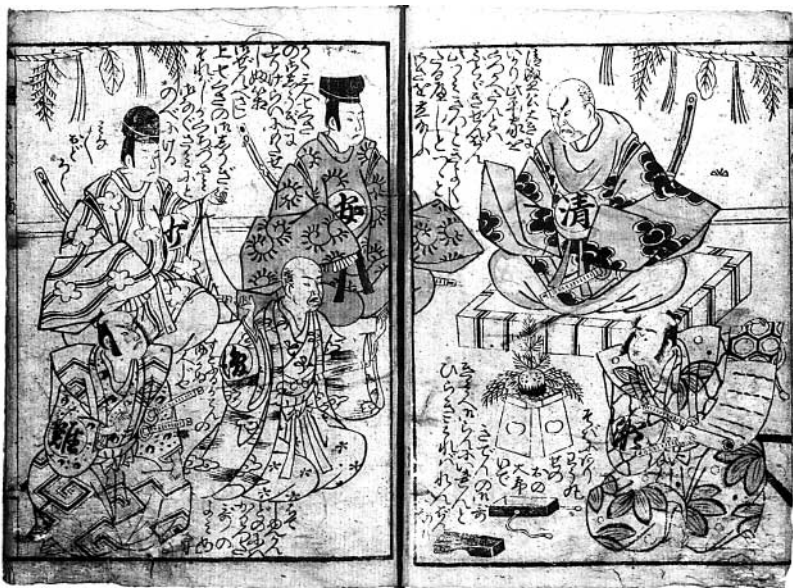
〔上〕

(1 オ)

すでに平家の世おさまりしかば、清盛の家臣、難波の次郎・瀬尾の太郎、兩人謀反の思い立ちけれども、俊寛・安頼・少将、三人の者どもが邪魔なりとて、三人の名を書きたる偽連判を拵へけれども、手懸りな

記すことが多いので、おそらく「〇」に「い」は、「亥」の年のことであろうと考えられる。

鳥居清経の作画期は、宝暦末期から安永末期とされるので『日本古典文学大辞典』鈴木重三解説、可能性としては、明和四丁亥年（一七六七）・安永八己亥年（一七七九）が挙げられる。三田村彦五郎識語に「明和四丁亥歳二月吉祥日」（中巻見返し）「明和四丁亥歳二月廿吉日 此主三田村彦五郎」（下巻裏見返し）とあることから考えると、本作の刊年は明和四年としてよいと推測される（安永八年は黄表紙の時代で、絵題簽の様式が異なる）。『青本絵外題集Ⅰ』（岩崎文庫貴重本叢刊）明和四年の項の、『那須与市扇子的』中之巻絵題簽は、版元は村田屋ではあるが、左上に「〇」に「い」とあるのが確認できる。



1ウ

し。兩人相談の所へ、俊寛の家来有王丸、立聞きし
ていたりしがつ、と出、「それこそ幸い、今日七草の御
祝儀に、主人より清盛公へ差し上る短冊、此短冊と連
判状を引替へおかれよ」。

(瀬)「でかした〜」

(1ウ・2オ)

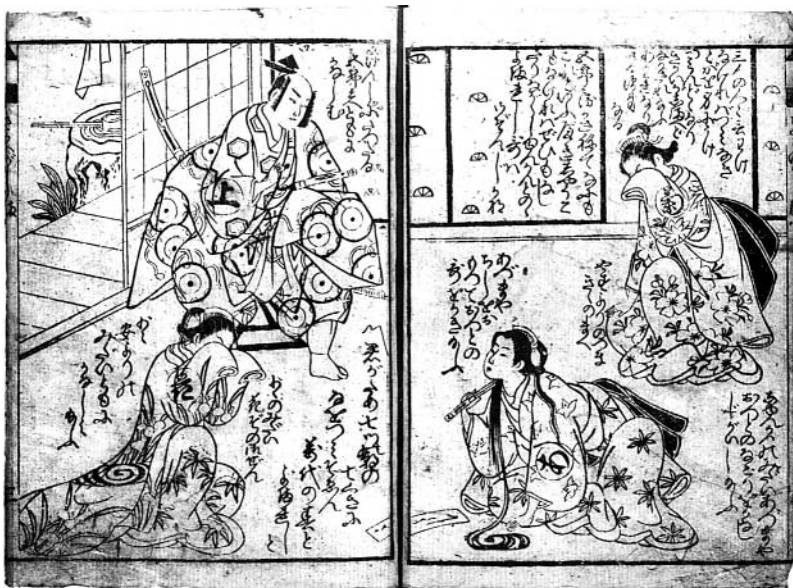
かく三人、七草の御祝儀に上り、家来に持たせし文
箱、御前へ差し上、七草の御祝儀、某が口づさみ、
御慰みにと述べにける。

そばに、有王丸・瀬尾の大郎出で、「貴殿の御歌、
君へ御覧に入れん」と開きみれば、連判なり。

清盛公大きに怒り、「此平家をくつがへさんとは不
届き千万、此罪きつと曲事たるべし」と、つ、と御座
を立給ふ。

みなくおどろ
皆々驚く。

(難)「すこぶる合点のゆかぬ人じや」



『鬼海嶋夢物語』「七小町図」影印・翻刻

3 オ

2 ウ

(難)「はて、俊寛殿には、変わった歌の詠みめされた」

(2ウ・3オ)

三人の人々、言訳なければ、罪なき咎を身に受け、
罪人となり、鬼海嶋へと流され給ふ。哀れなりける次第なる。

俊寛の御台東屋、夫の名残を悲し、自害し給ふ。

五郎兵衛、「重ねて何もこれといふべき証拠もなければ、是非もなし。さりながら、俊寛殿の詠まれし歌は、

御存知かな」。

東屋、血潮おもつて、夫の歌を書き給ふ。

君がため七つの朝の七草になを罪ぞ得ん万代の春、と詠まれしと。

検使に立つたる五郎兵衛、共に悲しむ。

少将・安頼の御台、共に悲しみ給ふ。

安頼の妻菊の前へ

少将の御台花園御前



4 オ

3 ウ

(3ウ)

かくて三人の屋敷は戸締にて、俊寛・安頼・少将、
三人共に、鬼海嶋へと流さる、。

(俊)「やア、是非ない」

(4オ)

俊寛は、一子徳寿の身の上を案じいたりし折から、
あまたの千鳥飛び来るを見て、都の方を懐かしげに眺
め、口づさみけん。

風渡る雲井の鴈の声よりも友呼ぶ千鳥なを哀れなる
水の上の泡同然、思いあきらめ、施餓鬼を書いて流
し給ふ。

(安)「とても此島に朽ち果てん我々が命」



5 オ

4 ウ

(4ウ・5オ)

かくて三人、哀れ催しいたりし折から、はるかの沖
に舟見へければ、皆々立ち上がり見るうちに、舟は岸
にぞ着きにける。

重盛公よりの上使、赦免状を読む。

(菊)「上使の趣余の儀にあらず。連判の内、少将・安
頼両人は名ばかり、俊寛一人は連判に血判あれば、俊
寛老人、島へ残すべしとの御上意」

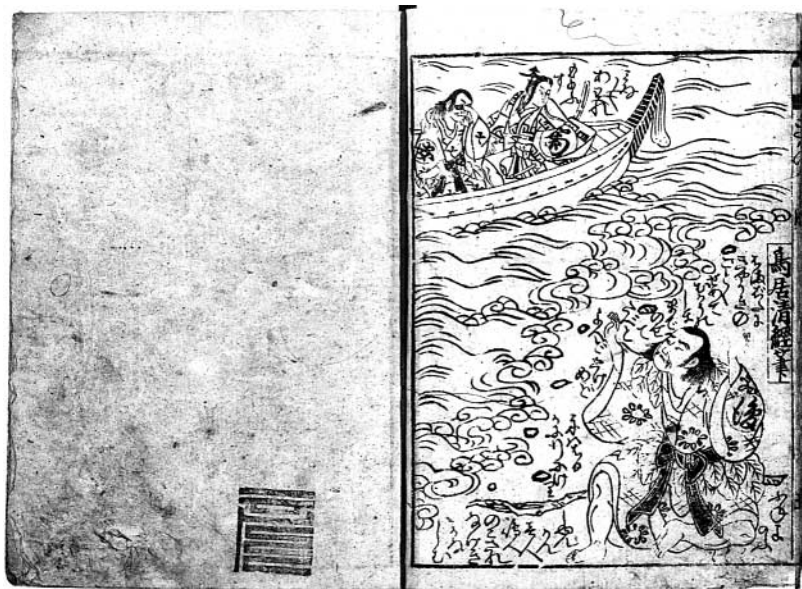
上意を聞き、俊寛大きに驚き嘆く。

(丹)「俊寛殿、御辺の心底察し入る。重ねての上意を

御待ち候へ」

教経の童わつばの菊王丸

丹左衛門



5ウ

(5ウ)

浜端に狂気のごとく、せめて向かうの島まで乗せて
給へと、呼べど叫めど、舟は遙かに行にけり。

俊寛しゆんかん上人、嶋へ残され、嘆き悲しむ。
皆々みな哀れあわれ催す。

(俊)「舟よのふくくくく」

鳥居清経筆



上巻裏表紙



中巻表紙





6 オ

〔中〕

(6 オ)

俊寛は、正体もなく、泣き倒れ、その夜は浜端へ泣き寝いたりにご臥しにけり。

俊寛、浜に嘆きいたりし折から、亀王丸、有王に繩を掛け来り、「汝、御屋敷を立ち退きしわと聞くより、有王が首打ち落とす子細あらん」と詮議せし所、残らず白状する。

(有)「何を隠さん、難波・瀬尾兩人に頼まれ、某が悪事なり」

(亀)「やい、ありあふに、抜かせく」



7 オ

6 ウ

(6ウ)

俊寛^{しゅんかん}大きに怒^{いか}り、「その方^{ほう}は、何ゆへこの島^{しま}へ来^{きた}りし。都^{みやこ}へ残^{のこ}りて、なぜ倅^{せがれ}と東屋^{あづまや}が身の上^{みのかみ}、介抱^{かひほう}せん。七生までの勘当^{かんとう}」。

亀王^{かみわ}謝^{あやま}り入^いていたりしが、君^{きみ}に勘氣^{かんき}を受け、生き長^{なが}らへて詮無^{せんな}しと、早^{はや}まつて切腹^{せつぷく}する。

亀王^{かみわ}、重^{かさ}ねて俊寛^{しゅんかん}に向^むかい、「何^{なに}とぞ某^{それがし}此島^{しま}へ残^{のこ}り、君^{きみ}へ御宮仕^{みやつか}ひ仕^{つか}らん」と願^{ねが}う。

これは亀王^{かみわ}早^{はや}まりしと、共^{とも}に嘆^{なげ}きしが、「某^{それがし}も腹^{はら}かつさばき、難波^{なんば}・瀬尾^{せのを}に恨^{うら}みをなさん」、吭^{かへ}を掻^かき切^きり死^しし給^{たま}ふ。

俊寛^{しゅんかん}の一念^{ねん}、虚空^{こくう}に飛^とび行^ゆ。

(7オ)

俊寛^{しゅんかん}が一子^{ひとこ}、徳寿丸^{とくじゆ}が首^{くび}を討^うたとせし所^{ところ}、太刀^{たち}さんぐに折^おれる。

花石丸^{むすね}も謀反^{むほん}人の一子^{ひとこ}なれば、首^{くび}を討^うち申^{まう}さんと、



8 オ

7 ウ

清盛公へ申上、六条河原を引出ス。俄に一天掻き曇り、
大雷にて、瀬尾の太郎が首を攫い行く。

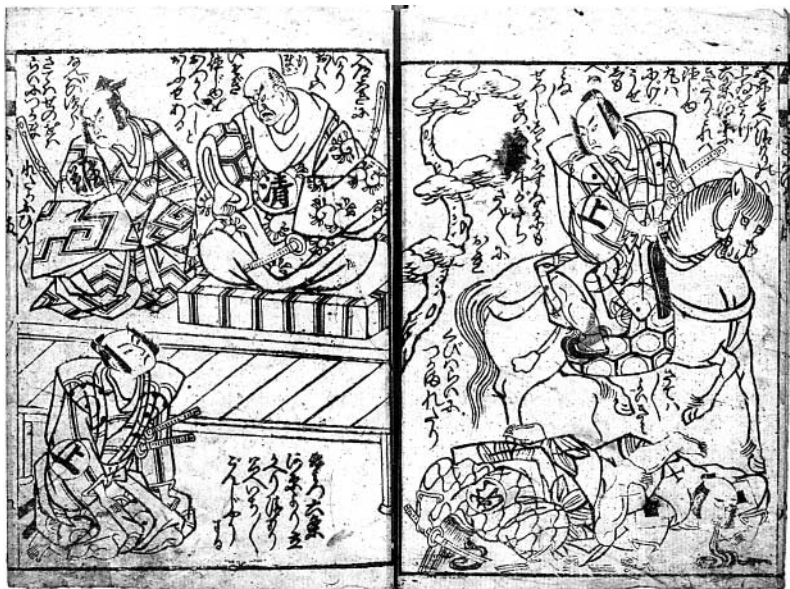
(徳)「南無阿弥陀仏」

(7ウ・8オ)

かくて清盛、碁を好き給ひ、六条御所へ和尚を呼び
合いて、碁を打つていたりしが、俄に黒雲舞下がり、
雲中に声あつて、「我はこれ、嶋にて死せし俊寛が一念
なり。一子徳寿丸を殺すにおいては、永く子孫の断つ
べきぞ」と、何やら地に響きして、大地へ落つる。

入道大きに怒り、「忠光、急ぎ見届け来れ」との給ふ。
五郎兵衛、立ち寄り見れば、検使に立し、瀬尾が生
首なり。

(和尚)「くわばら〜〜〜」



9 オ

8 ウ

(8ウ)

五郎兵衛は、清盛の上意を受け、六条河原に來り見れば、徳寿丸は逃げ失せ、下部は皆々絶入して死すなかに、瀬尾の太郎が太刀、散々に折れ、首は雷に擱まれたり。

(上)「さてはく、よい気味」

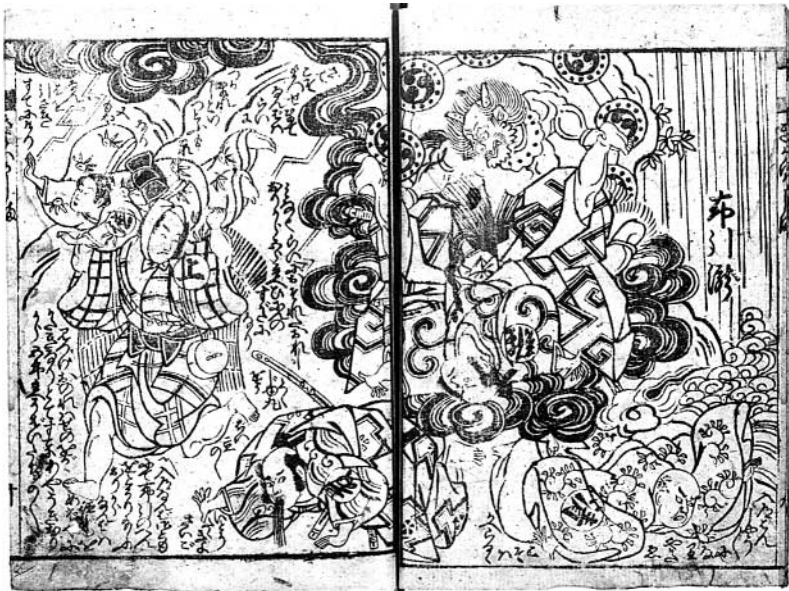
(9オ)

忠光、六条河原より立歸り、清盛公へ、いちく言上する。

入道大きに怒り、「多くは行まし。急ぎ徳寿を追つ掛くべし」と仰せある。

難波の次郎

(難)「さては、瀬尾は雷に擱まれたか。不憫く」



10オ

9ウ

(9ウ・10オ)

布引滝

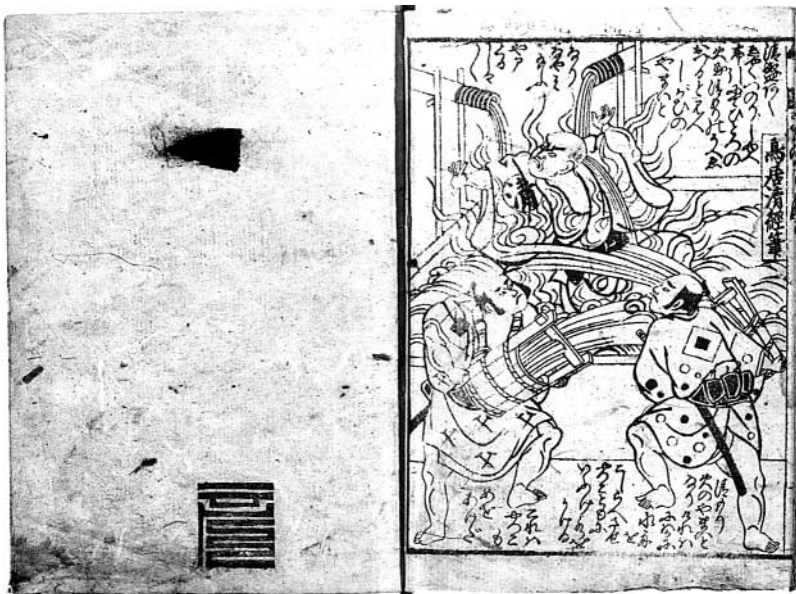
入道、難波御供にて、布引の辺を通り給ふ折から、
難波は徳寿を見つけ、「おのれは瀬尾がめば□に敵なり」とて、既に危うき折から、五郎兵衛、奪い立ち退く。

皆々雷に恐れ、倒れし折から、五郎兵衛、非人の姿になり、徳寿丸を奪い立退く。

さてこそ、末世迄、難波は雷に掴まれしといつともこれなり。

又もや、難波を引裂き捨てにけり。

入道、半生くになり、館々こそは、帰らるゝ。
伊藤忠清最期



10ウ

(10ウ)

清盛悪逆募りし故、布引にて一つの火玉、清盛の上へ落つると見へしが、火の病となり、悩み給ふ。

(清)「やア、苦しや〜」

清盛火の病となりければ、俄に水舟を拵へさせ、奴共にいつけ、水を掛ける。これは奴も目をあけた。

鳥居清経筆



中巻裏表紙



下巻表紙





11才

「下」

(11才)

かくて重盛公、父の火の病を見て、「悪逆募りしゆ
への父の姿、某も共に悪人の名を取らんより」と切腹
する。

(重)「その方後へ残り、父の介抱して、某が跡、懇ろ
に弔いくれよ」

御台蘭の方、嘆き給ふ。



12オ



11ウ

(11ウ・12オ)

忠光、小松殿の上意を受け、嶋へ来る。

(上)「はてさて、正体もなき、なり様よなア」

(男)「さて、此島に一人しゆんかんとしているは、寂

しそうなもので御座ります」

亀王丸、徳寿丸を伴い、島へ来る。

俊寛は、浜端へ正体もなく倒れている。

「もふし、我が君様、重盛公様よりの御使者なり」

と申ける。

(亀)「さてく、きつい寝入りやう」



13オ



12ウ

(12ウ・13オ)
 俊寛は、亀王が声に驚き、むつくと起き、あたりを
 見れば、五郎兵衛・亀王丸・一子徳寿丸なり。
 (徳「父様、お久しうござります」
 (俊「さては、今のは夢であつたか」
 忠光、赦免状を読む。
 重盛公の仰せありしが、某清盛の館にて、難波・
 瀬尾兩人、密に三人の者共に、偽迎いを遣わし、嶋戻
 り次第に打ち捨て、島にて死したる体にせんと、相談
 せし、を、某聞くよりも、先越されじと、菊王・丹
 左衛門兩人遣わせしが、清盛の御前に帰る道にて、安
 頼・少将兩人、瀬尾が手に懸かり最期、重盛の情けに
 て、その方一人残りし。



14オ



13ウ

(13ウ)

忠光、^{たけみつ}「某、^{それがし}これより直に身を簞し、^{すく}貴殿の^{きでん}家来有^{けらい}王が行方^{ゆくへ}を尋ね、^{たづ}東屋の^{あづまや}形見、^{かたみ}かの歌をもつて詮議^{せんぎ}せん」。

亀王丸御供^{かみわまるごとも}

「東屋^{あづまや}殿は、^{きでん}貴殿の別れ、^{ふか}深く悲しみ、^{むな}空しくなり給ふ^{ものがた}」と物語りする。

(俊)「さては、^{あづまや}東屋は、^{あい}相果てましたか」

(14オ)

かの短冊^{たんざく}を、^{くわい}懷中より出し読みける。

君がため七つの朝の七草に、と読む。

忠光、^{みつ}屋根^{やね}葺きとなり、^{あり}有王に酒を勧め、^す寝^ねいたり

しうち、いろ／＼問いかければ、^{いち／＼}一々白状するゆへ、

縄^{なわ}を掛け、^{ごぜん}御前へ引く。

有王丸、^{わう}大工和郎となり、^よ酒に酔い、^{ねごと}寝言に思わず、

歌の下^くの句を付ける。



15オ



14ウ

下の句、なを罪ぞ得ん万代の春。

(14ウ・15オ)

(重)「おのれらは、よくもなくんだな。やア〜、菊王、彼ら三人を、六条河原へ引出し、獄門に晒すべし」

(俊)「いかに有王、天罰思い知つたか」

(上)「これこそ、俊寛の妻東屋の、血潮ほもつて書かれし夫の歌。此歌ゆへ、汝が寝言に、下の句を付け

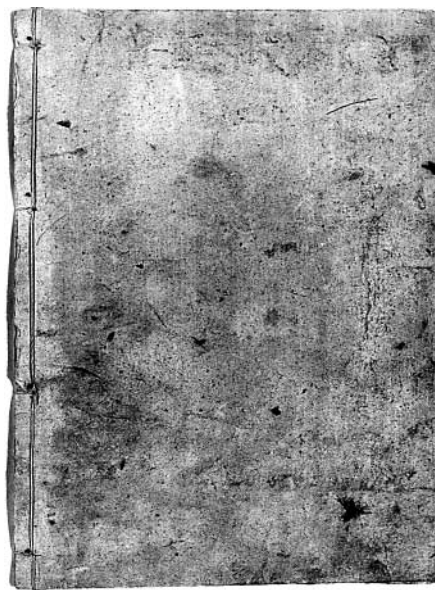
しも、一重に東屋殿の陰ならん」

(菊)「委細かしこまりました」

(有)「寝言ゆへ知れたか。けち、いま〜しい」



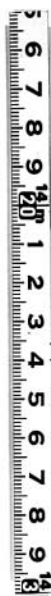
15ウ



下巻裏表紙

(15ウ)
 君がため七つの朝の七草になを罪ぞ得ん万代の春
 此歌の徳にて、君の御疑いも晴れたれば、我家の宝
 物にせんとて、末繁昌に栄へける。
 (亀)「めでとふ存じます」

鳥居清経画



『七小町図』 5
チ 5
4394

富川房信画 細判三十一・九×一四・五種 版元鶴新

解題

富川房信は青本黒本期の草双紙の代表的な作者である。この『七小町図』は、宝暦・明和期の浮世絵版元である鶴新から出版されたもので、浮世絵の細判サイズである。一枚摺の草双紙とも墨摺浮世絵とも、とらえることができる。残存する類例は少ないと思われるので、影印紹介することとした。

上から、「草紙洗小町」「雨乞小町」「通小町」「清水小町」「関寺小町」「卒塔婆小町」「鸚鵡小町」の順である。
翻刻

まかなくなになにをたねとてうきくさのなみのうね／＼おひしげるらん
ことはりや日の元なればてりもせめさりとは又雨がしたとは
あかつきのしゝのはねがきもゝはがききみがくぬよはわれぞかずかく
何をして身のいたづらにおひにけんたきのけし(き) はかはらぬものを
わびぬれば身をうきくさのねもたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ
ごくらくのうちならばこそあしからめそとばかりはくるしかるらん
くもの上はありしむかしにかはらねどみし玉だれの内ぞゆかしき

(きら すえお 早稲田大学文学部教授)

(いとう よしたか 湘北短期大学専任講師)

(ふたまた じゅん 明治大学非常勤講師)